

文書館のしごと⑫
文書の補修 その1

文書館の所蔵文書には様々な原因により破損しているものが数多くあります。

文書の破損の状態や利用のニーズに即して補修が必要かどうかを判断し、その文書に適した補修の方法を選び、文書の持つ情報を損なわないように必要最小限の補修を行い、閲覧などの利用に支障がないようにして文書を保存することは、文書館の大事な仕事の一つです。

破損した文書の補修には、文書修復に関する専門的な技術、豊富な経験・知識が求められ、いろいろな材料・道具・装置などが必要です。文書館では、文書はできるだけ元の形で保存していくのが望ましいという考えに基づき、保存と利用に支障がなければ安易に文書の補修はしません。また、裏打ちなどの本格的な補修が必要な場合は、修復の専門家に依頼することにしています。

しかし、埃やカビなどで汚れた文書や、破損箇所をセロハンテープで接着した文書、ホッチキスの針やクリップなど金属類で綴じられ、錆びの発生している文書などは、そのまま放置しておくことで劣化が進み、保存上よくありません。また、表紙の題箋がはがれてしまった和書や、紙の継ぎ目がはがれた文書、折り目の破れた地図などは、閲覧などの利用に支障をきたします。そこで文書館では、こう



写真1 文書の埃はらい

した破損文書については、修復の専門家と相談し指導を受けながら、できる範囲で簡易な補修を行っています。文書の補修は地道な積み重ねのいる作業ですが、閲覧などで出納した際や整理中に破損が見つかった文書に、そのつど破損に応じた手当てをしていけば、日常の業務の中で補修に取り組むことができます。

補修は、①原形の保存（補修は必要最小限にとどめ、文書の原形をできる限り残す方法・材料を選ぶ）、②安全性（文書に影響の少ない長期的に安定した材料や方法を使う）、③可逆性（必要に応じて元の状態に戻せるような補修材料や方法を選ぶ）、④記録化（補修前の文書の状態や補修内容を必ず記録に残す）という四つの原則を守って行います。

では文書館で実際に行っている文書の補修をいくつか紹介しましょう。

文書の埃はらい・皺伸ばし・カビの除去
埃、すす、虫のふんや死骸などで汚れている文書は、刷毛を使って埃をはらい

ます（写真1）。埃はらいは文書を保存する環境を良くしますし、文書の劣化をふせぐのにも有効です。刷毛は毛の柔らかなものを使い、破損した箇所などを傷めないよう注意し、埃が文書の中に入らないよう、刷毛を動かす向きに気をつけます。刷毛では落ちにくいこびり付きなどは、ピンセットで取り除きます。文書の折れや皺も刷毛などでしっかりと伸ばします。文書館では、はらった埃が飛散しないようへパイルター付きの集塵機（市販の掃除機を利用して作ったもの）を使用していますが、作業中は換気を十分おこない、マスクなどを着用します。カビが発生している文書は、そのままにしておくとカビが広がる可能性もあり、文書を扱う人の健康にも影響を与えるので、殺菌作用のある七〇％に薄めたエタノールを柔らかな布に含ませて、カビの部分を押しさえながらふき取ります。その後は、文書をしっかりと乾燥させて収納します。

文書の継ぎ目の糊さし・題箋の糊付け
縦継紙や切継紙などの文書で、継ぎ目がはがれてしまったものは、はがれた糊しろの部分に筆で糊をつけて（写真2）貼り合わせます。継ぎ目の部分に文字などがある場合は、ずれないように注意しながら貼ります。貼り終わったら、上から不織布（レーヨン紙など）をあてて押さえ、しっかりと乾燥させます。

和書などの表紙の題箋がはがれたものは、糊を付けて元の位置に貼り直します。

はがれた部分が汚れていたら、糊を付ける前にクリーニングしておきます。題箋の裏側に筆で糊をつけて表紙に貼り付けますが、表側に糊がみださないうような筆を題箋の内側から外側に動かして糊をつけるようにし、はみだした糊は拭き取っておきます。糊が薄すぎると表紙に染み出し不要な輪染みができてしまいます。元の位置に貼り終わったら、上から不織布をあてて重しをして、しっかりと乾かします。

補修に使用する糊

補修にはセロゲン（カルボキシメチルセルロース）や生麩糊、添加物の入っていない市販のどんぶん糊などを薄めて使用します。生麩糊は生麩粉を水で溶き加熱したものを漉して作ったもので、腐りやすいので冷蔵庫で保存します。生麩糊やどんぶん糊の濃さは、糊さしに使用する場合はヨーグルト程度の固さを目安にして、水で調節します。（下向井祐子）



写真2 はがれた継ぎ目の糊さし